

エジプト先王朝時代、ナカダ遺跡における合葬墓

—未公開資料を用いた埋葬様式分類と空間分析からの墓地利用の検討—

黒沼 太一

Predynastic Multiple Burials in the Cemeteries at Naqada:

Determining Cemetery Usage through the Classification of Burial Type and Spatial Distribution

Taichi KURONUMA

本論では、エジプト先王朝時代ナカダ文化の標識遺跡であるナカダ遺跡を対象に、同遺跡での墓地利用の一端を考察した。この目的のため、単葬墓が主流の中で例外的な、複数の遺体を埋葬する合葬墓を対象に、未公開資料を活用してその集積と検出状況の分類を行った。その結果、合葬墓はタイプⅠ：同時埋葬墓、タイプⅡ：追葬墓、タイプⅢ：改葬墓に分類でき、ナカダ遺跡の3つの墓地では、大墓地ではタイプⅠを主体に3種全てが見られる一方、B墓地ではタイプⅡを、T墓地ではタイプⅢを主体にした埋葬様式が見られた。このことから、墓地によって埋葬様式に選択性が示唆され、墓地の利用者が自身の帰属する共同体や社会階層の枠組みに規定されて造墓を含む葬送儀礼に参画していたと推察された。

キーワード：合葬墓、未公開記録、ナカダ文化、エジプト先王朝時代、墓地利用

This paper ascertains if the use of cemeteries in Predynastic Egypt was defined by societal criteria such as lineage or social stratum. This research focused on multiple burials in three cemeteries in Naqada in order to classify their spatial distribution and attributes. The results indicate a difference in dominant multiple burial types by cemetery, especially in regard to attached burial (Type II) in Cemetery B and secondary burial (Type III) in Cemetery T. In the Main Cemetery, simultaneous burial (Type I) is dominant but Types II and III were also observed. This difference in dominant multiple burial type reflects the regulation of burial customs by the community or the social stratum of the 'user' of the cemetery. It is assumed that cemetery users participated in mortuary ceremonies and built graves according to these regulations.

Key-words: multiple burial, unpublished records, Naqada Culture, Predynastic Period, cemetery use

1. はじめに

紀元前4千年紀のナイル河下流域(図1)に存在したナカダ文化(Naqada Culture)の墓地は、紀元前3050年頃に成立する第1王朝に向けた社会の複雑化の看取を目指した研究の主要な対象であったことは論を俟たない。そこでは19世紀末から20世紀初頭にかけて発掘された遺跡の報告書から、統計的な手法により造墓への労働投下量や希少品の有無・多寡などが分析され(Bard 1994; Griswold 1992など)、社会階層が国家形成過程の進展とともに複雑化し、階層による墓地の区別化が進むといった現象が明らかとされてきたが、当時営まれた墓制の仔細が十分に解明されているとは言い難い。この背景には、19世紀末から20世紀半ばまでに、重要な遺跡を含む、ナカダ文化墓地の大部分

が十分な基礎情報の公開を経ずに調査され(Hendrickx and van den Brink 2002: 348-369)、埋葬の仔細な分析を通じた遺跡の再評価が大きく阻害されている事情がある。

しかしこうした状況は近年変化しつつある。発掘調査により、親族組織を1単位として形成された円環状の墓群が検出されたヒエラコンポリス(Hierakonpolis)遺跡HK43地点(Friedman et al. 1999; 馬場 2014: 200-201)など、調査現場の成果から従来の議論を超え出た墓制像が展開され始めているほか、A. スティーヴンソン(Stevenson)は1910-11年に発掘されたゲルゼー(Gerzeh)遺跡を発掘時の原記録から遡及しつつ検討するなど(Stevenson 2009a, b)、未公開資料を活用した初期に発掘が行われた遺跡の再評価が、ナカダ文化墓制研究の進展のために重要性を帯

びてきている。

以上から、本論では未公開資料を活用し、これまで公開情報の乏しさ故に実態が不明瞭であった複数の遺体を埋葬した合葬墓に着目し、ナカダ文化墓制の一端を明らかにすることを試みる。ナカダ文化の墓制において、合葬墓は例外的な埋葬であり、その造営には単葬墓とは異なる何らかの要因が予想され、ナカダ文化の墓地形成の一面を提示し得ると考える。

従って本論では、合葬墓を集成・分類し、その埋葬上の特徴を看取することを第一の目標とする。その上で、墓地内での合葬墓の分布を把握し、集団や社会階層など墓地利用の一端の検討を第二の目標としたい。この議論のため、本論では上エジプト (Upper Egypt) に所在し、1894-95年に発掘された重要遺跡であるナカダ遺跡を対象とし¹⁾、発掘報告書に加え、発掘者らによる調査時の原記録 (以下、ノート) を活用した検討を行う。なお本論では、今日のナカダ文化研究で一般的な S. ヘンドリクス (Hendrickx) の土器編年 (Hendrickx 1996, 1999, 2006) に則った議論を

試みる (表1)。

2. 先行研究

2.1. ナカダ文化の基本的な埋葬様式と合葬墓に関わる先行研究

ナカダ文化の墓制では、素掘りの土坑墓内に、左半身を下に、頭位を南に、顔を西に向けた屈葬形態の被葬者が1体埋葬される様式が基本である (Midant-Reynes 2000)。ただし、埋葬の頭位方向などは、各遺跡近傍のナイル河の流路方向を基準としているようであり (Castillos 2015)、必ずしも正確に南北方向を指向していない。この埋葬に、土器やビーズ・ペンダントなどの装身具を主体とした副葬品が納められる。副葬品の量や質に関しては、墓によって多寡が見られる。また多数を占める墓坑の平面形状も楕円形から長方形へと変化し、深く掘削した事例が現れるほか、被葬者が納められる棺などを備えた事例も現れ、レンガ造りの囲壁・内部壁体が設けられた事例なども出現するようになる。このような基本的な埋葬様式や墓制の発展過程はナカダ文化全体で共通しているものの、古くは G. A. レイズナー (Reisner) が「(先王朝時代の墓には) 似た墓は一つとしてなく、様々な変異が見られる」と述べたように (Reisner 1936: 1)、副葬品の種類や点数、墓の構造、被葬者の人数や性別・組み合わせなどの点で、細かな差異を見せている (cf. 馬場 2014)。

この基本的な埋葬様式の中で、複数の遺体を埋葬する合葬墓は、あくまで例外的である。合葬墓の存在は、1894-95年にナカダ文化の墓地では最初となるナカダ遺跡での発掘調査 (Petrie and Quibell 1896) で確認され、その後も他の遺跡で散発的に検出されたが、その言及は報告書の記載や概論中で僅かになされる程度で、合葬墓を主体的に取り扱った事例に乏しい。例えばアバディーヤ (Abadiya)・セマイナ (Semaina)・フー (Hiw) の各遺跡の報告書、ではナカダ I 期初期の合葬墓が多く存在したことが窺える

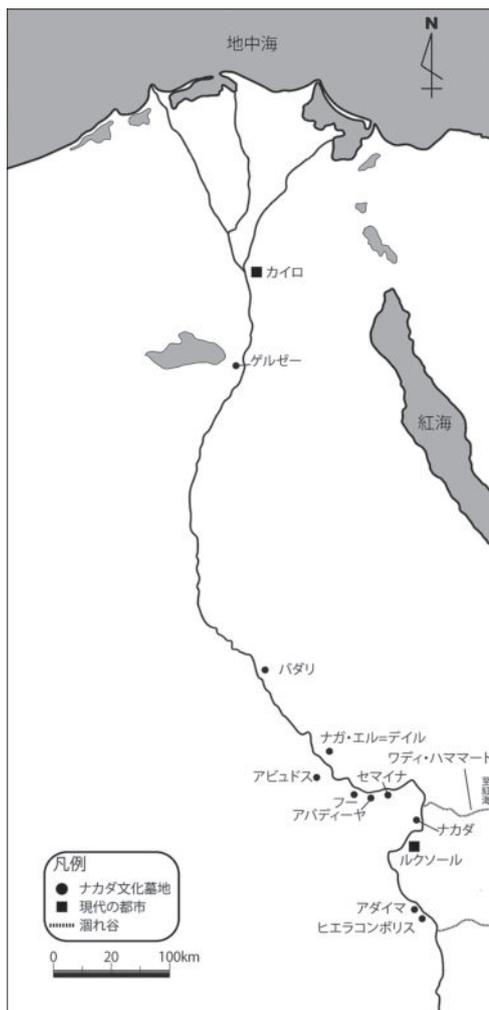


図1 本論で言及する遺跡

表1 ナカダ文化期の編年

| 絶対年代(cal. BCE)* | ヘンドリクス編年** | カイザー編年*** | ピートリー編年**** |
|-------------------|------------|----------------------|-------------|
| 3800/3750(?)–3400 | I A | I a | 30 |
| | I B | I b | |
| | I C | I c | |
| 3400–3325 | II A | II a | 38 |
| | II B | II b | |
| | II C | II c | |
| 3325–3085 | II D1 | II d1 | S.D. |
| | II D2 | II d2/III a1 | |
| | III A1 | III a1 | |
| 3085–2867 | III A2 | III a2 | 63 |
| | III B | III b1/III b2/III c1 | |
| | III C1 | III c2 | |
| | III C2 | III c3 | 78 |
| | III D | – | |

*Stevenson 2016: Table 2, **Hendrickx 2006, ***Kaiser 1957; 1990, ****Petrie 1921

(Petrie and Mace 1901: 32-36)。また B. ミダン＝レーヌ (Midant-Reynes) は概論中で同じくナカダ I 期に合葬墓が頻繁に見られ、多くの場合、恐らく母親と思われる女性と新生児の組み合わせであるとしている (Midant-Reynes 2000: 47)。また K. M. チャウオーヴィッチ (Ciałowicz) はアビュドス遺跡 B 墓地など、ナカダ III 期の王墓に付随する陪葬墓の起源を検討する中でナカダ遺跡 T 墓地の T5 号墓といった若干の特徴的な墓に関する言及を行ったが、詳細には踏み込んでいない (Ciałowicz 1998)。このように、これまでの合葬墓に関する言及では、頻出する時期や性別・年齢の組み合わせなどの傾向は述べられたが、遺構の検出状況の集成や墓地内での偏在性といった詳細に踏み込んだ事例はほとんど管見に触れない。こうした状況の中で、A. P. トーマス (Thomas) は合葬墓が造営される理由として、母子の出産時や直後の死、幼児期の子どもの死があることに言及しつつ、疾病による影響や埋葬慣習など様々な背景が存在する可能性を推定している (Thomas 2004: 1045-1047)。この言及は悉皆的な集成作業から導き出されたものではないが、ナカダ文化社会で合葬墓が造営される要因を検討した事例として重要性を有するといえよう。

2.2. 問題点

以上から、ナカダ文化における合葬墓はナカダ文化期の初期に多く見られ、多くの場合母子関係と想定される被葬者が埋葬される墓といった認識以上に基本的な情報が整理されておらず、理解も進んでいるとは言い難い状況にあると言える。また、合葬墓造営の背後に存在する可能性がある親族組織などの社会的な要因などは具体的には検討されていないと言えるだろう。将来的には、スティーヴンソンが述べるように多数の遺跡を横断的に取り扱ったナカダ文化の合葬墓の統計的な調査が必要 (Stevenson 2009a: 12) と考えられるが、19 世紀末 -20 世紀前半の発掘報告書は記載内容に乏しく、また現在継続中の発掘調査は結果の多くが未公表である現状では、比較分析として扱うべき事例が断片的なことは否めない。むしろ現時点では、新規発掘による成果の公表を待つとともに、未公刊資料から少しでも事例を回収して資料数を増やし、合葬墓に関連する墓制の検討を重ねることが重要だろう。同時に既存の報告書などでは一括りに扱われてきた合葬墓も、検出状況に基づいた分類作業などの整理が必要となってくる。従って以下では、ナカダ遺跡の基本情報と特色を提示したのち、同遺跡における合葬墓の集成と分類をまず試みる。次いで分類した合葬墓ごとの特徴を看取し、ナカダ遺跡における合葬墓の分布を観察して、合葬墓の成因とともに、墓地利用の一端について検討を行いたい。

3. 対象遺跡：ナカダ遺跡の概要

3.1. ナカダ遺跡とその周辺の遺跡

ナカダ遺跡は、カイロから南南東におよそ 480 km、ルクソールから北北東におよそ 25 km のナイル河西岸に所在する墓地遺跡である。遺跡は、上エジプトにおける現存のナカダ文化墓地遺跡に一般的なナイル河氾濫原の外側に広がる低位砂漠に位置している (図 2)。本遺跡では、1894-95 年に行われた W. M. F. ピートリー (Petrie) らによる発掘調査により (Petrie and Quibell 1896)、ナカダ文化の墓地遺跡としては初めて大規模に遺物や遺構が発見され、ナカダ文化の指標遺跡としてその名を学史に留めている。ピートリーらによる調査ではわずか 1 シーズンで、大墓地・B 墓地・T 墓地・G 墓地の四か所の墓地で合計 2200 基 (大墓地：少なくとも 1953 基、B 墓地：少なくとも 137 基、T 墓地 56 基) を超える土坑墓が発掘された²⁾。G 墓地を除く各墓地の存続期間は、それぞれ大墓地がナカダ I A-III C1 期、B 墓地がナカダ I B-II D1 期、T 墓地がナカダ II B-III B 期である (Hendrickx and van den Brink 2002: 360)³⁾。従って、ナカダ遺跡周辺ではまずナカダ文化期初期から大墓地が、次いでわずかな時間差を置いて B 墓地が使用を開始され、ナカダ II 期になってさらに T 墓地が分化したことが確認できる。これら 3 墓地は、K. A. バード (Bard) によってナカダ文化期の社会階層研究に関する対象遺跡とされ、副葬品のクラスター分析によるナカダ II 期を境とする階層の複雑化が指摘された (Bard 1994)。

大墓地の東側にはその母体となったとされるサウスタウン (South Town) と呼称される集落址が存在し、墓地遺跡と合わせてピートリーらによって発掘調査が行われた。

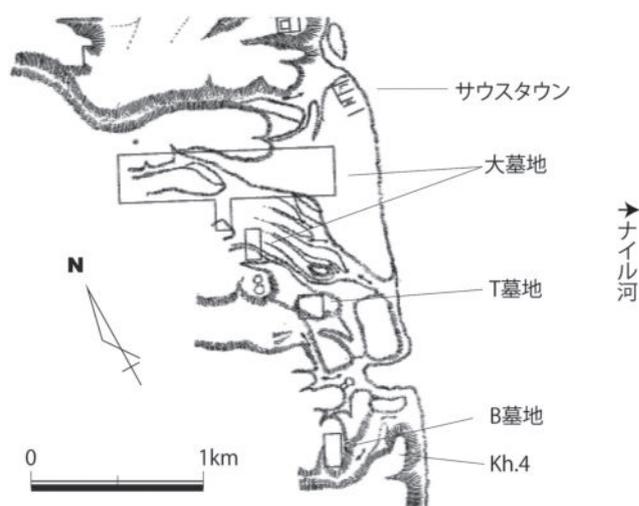


図 2 ナカダ遺跡大墓地・B 墓地・T 墓地、および周辺遺跡位置図 (Petrie and Quibell 1896: Pl. IA を改変)

サウスタウンよりさらに北にはノースタウン (North Town) と呼称される別の集落址が確認・調査されている。サウスタウンでは、イタリア隊 (Barocas 1986) (1977-84年) やアメリカ隊 (Hassan and Matson 1989) (1980-81年) が再発掘を行い、特にイタリア隊の調査では印章が押された封泥が発見されており (di Maria 2007)、物流上の拠点であったと示唆された。ナカダ遺跡は対岸にワディ・ハママート (Wadi Hammamat) の入り口が所在する地理的特徴を有し、東部砂漠や紅海方面からの諸資源がサウスタウンなどの集落址を経由してナイル河流域の各地へと流通したことが想定される。サウスタウンは、このように交易の中心地としてナカダ文化期の中心的役割を担った経緯に加え、ナカダ遺跡墓地の母体となった遺跡であることに鑑み、バードによる墓地資料を用いた階層化の研究結果と合わせて、社会の複雑化を、集落と墓地双方から追うことができる遺跡として重要性を有していると考えられる。

周辺では、1960年代の W. カイザー (Kaiser) と K. W. ブッツァー (Butzer) による一般調査でサウスタウンやノースタウン以外の小規模な集落址や墓地の存在が言及された (Kaiser 1961: 14-18) ほか、アメリカ隊による低位砂漠と氾濫原の縁辺部の一般調査によってエル=クッタラ (el-Khattara) と呼ばれるナカダ I-II 期を主体とする小規模な集落址と墓地 (Kh. 1-7 地点) (Hassan and Matson 1989 など) が、ベルギー隊によりエル=アバディーヤ (el-Abadiya) 第2地点でのナカダ I 期の集落址 (Vermeersch et al. 2004) などが確認・発掘されていることから、時期を下るにつれて、ナカダ遺跡周辺では居住地の集約化が起こったと考えられる。なお、ナカダ遺跡のおよそ 8km 南には、1897年に J. ド・モルガン (de Morgan) によって初めて発掘調査されたナカダ III C1 期 (第1王朝) の王族墓または高位の行政官墓と推定されるマスタバが存在し (de Morgan 1897; van Wetering 2012)、ナカダ遺跡を中心とする地域が国家形成後も政治的に何らかの重要性を帯びていたと推定される。

3.2. ピートリーによるナカダ遺跡の発掘報告と後代の補完研究

上記したナカダ遺跡の重要性の一方、ピートリーらによるナカダ遺跡の発掘調査と発掘調査報告書の刊行は 1896 年に行われ (Petrie and Quibell 1896)、今日的水準から見るとその内容は十分とは言えない。発掘報告書では、当時未知であった物質文化に関わる情報の整理を行う意図があっただけか、出土遺物は分類・編年などに重点が置かれ、検出遺構は特徴的・代表的な遺物や特筆される構造・埋葬様式の墓が選択的に詳述されているのみで、発掘者たち以外に遺跡全体を評価することが困難なものであった。例え

ば、墓坑の平面図は合計 24 基が図化されているに過ぎず、記載された墓の総数は、平面図が図示された事例や、埋葬の部分的な言及に限られる事例を含めても全体のおよそ 7.2% に当たる 158 基に限られている。

しかし、ナカダ遺跡が他の同時期に発掘された遺跡とは異なる点は、後世に発掘者による一次記録への大幅な補完作業にある。E. J. バウムガルテル (Baumgartel) は、発掘資金の提供による見返りなどの理由 (Stevenson 2013) で欧州や北米の諸博物館に分配されたナカダ遺跡出土遺物を 1950 年代から実見し、各墓の検出副葬品数や種類などを記した目録を作成した。また、彼女は同時期にユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドン (UCL) で発見されたピートリーらによる発掘調査時のノートに記された各墓の記載を集成し、目録に組み込むことで、ピートリーによるナカダ遺跡の出土遺物の補完を行った (Baumgartel 1970)。後に追加や修正が加えられたものの (Payne 1987)、彼女の目録は今日でもナカダ遺跡における各埋葬の詳細な情報を提供しており、ナカダ遺跡を再評価するための素地は整えられてきたと言える。

さて、バウムガルテルらによるピートリーらの発掘調査の出土品目録は、ナカダ遺跡の再評価に向けた素地を提供した一方、目録に組み込まれたノート記載情報は一部のみであり、埋葬の仔細な研究にあたり、なお複数の重大な問題点を有していることは否めない。例えば、ノートには各墓の検出状況のスケッチが記されているが、バウムガルテルの目録には数基が例示されているにすぎず (Baumgartel 1970: 2)、ノート上の各墓の規模に関する情報も目録に加味されていない。従って、個々の副葬品の情報は手取し得るものの、遺構を含めた埋葬コンテキスト中でそれらを位置付けることは困難である。また、調査で出土した副葬品全てが博物館に収蔵されているとは限らず、目録に記載された遺物の組成が発見時の点数を反映しているとは限らない。

3.3. ノートの実見とデータベースの作成

こうした必要不可欠にも関わらず欠落していた部分を補うため、筆者は 2013 年にノートの原本が所蔵されている UCL のピートリー・エジプト考古学博物館を訪れ、許可を得てデジタルカメラを用いてノートの写真撮影を行い、取得データの検討を行った⁴⁾。実見により、ノートからは三か所の墓地から確認された全墓坑のおよそ 44.2% に当たる合計 973 基の墓の情報が得られ、その結果、被葬者や墓坑内での位置など、新たな検討のための基礎が把握されるに至った。これらの情報は、Microsoft Excel を用いて作成したバウムガルテルとペインの目録に加えてデータベース化を行い、出力を可能とした。

4. 分析

4.1. 合葬墓の集成

分析に先立ち、まず発掘調査報告書、並びにノートから遺体を複数収めた墓の集成を行った。集成対象は、大墓地、B墓地、T墓地である⁵⁾。集成作業では、平面図から遺体の検出状況が確認できる事例を優先し、文字情報のみの場合は、検出状況が復元可能な事例のみ集成した。また平面図に複数の遺体が記載された場合でも、より新しい墓による古い墓の破壊など、遺体間に直接的な関連性がないと判断した事例は除外した。なお集成では、ナカダ遺跡検出遺体から頭蓋骨・下顎骨の測定、性別・年齢の同定を行ったC. D. フォーセット (Fawcett) による計測表も活用した (Fawcett 1902: Tables I-IV, VI-VIII)。フォーセットは総計で374体分の計測を行ったが⁶⁾、ここで彼女の表を参照した意図は不完全な報告文の記載内容を計測表から補い、各墓の被葬者の人数を把握する事実確認にあり、筆者の専門外である頭蓋骨測定結果の妥当性などの詳細には立ち入っていない。ナカダ遺跡などの19世紀末-20世紀初頭の発掘調査における人骨の鑑定は、特に性別・年齢の同定精度に問題が指摘されており (Mann 1989)、本稿では被葬者間の性別・年齢の組み合わせは扱わないこととした。また、各墓の年代はヘンドリクス編年 (Hendrickx 1989: 317-378) を参照した。ヘンドリクスによる年代が不詳の事例に関しては、基本的に「時期不明」として取り扱っているが、ピートリー (Petrie 1921) やペイン (Payne 1992) などの編年案では年代が与えられている事例があり、必要に応じて分析結果の解釈の際に参照した。

4.2. 分析方法

集成作業を行ったのち、ナカダ遺跡における合葬墓の特徴を看取するため、A. 埋葬様式の分類、およびB. 墓地内での空間分析の2つの分析を行った。

A. 埋葬様式の分類

他遺跡での検出事例を念頭にしつつ、被葬者の埋葬状況、及び墓の構造から、集成できた墓の埋葬様式を分類した。埋葬状況は体位や遺体間の相対的な配置関係を、墓の構造は墓坑形状などを判断材料とした。この分類では、遺体の検出状況が重要となるため、埋葬時の状態が保持されていることが理想である。ただし未盗掘であったとしても、元来の埋葬を完全に保持している事態は考え難いため、個々の埋葬事例の分類に当たっては、平面図に記載された検出状況に加え、発掘者による発掘時の見解や盗掘の有無に関するコメントなどノートに記載されている検出状況などにも留意した。

B. 墓地内での合葬墓の空間分析

墓地内での合葬墓の分布を確認するにあたり、1: 墓地内における合葬墓の造営場所や、その分布が特定の墓群を形成するか、または単葬墓と混在して造営されるかについて、また2: 合葬墓の立地と墓地の形成過程の関連性について、を重視した。分析に先立ち、大墓地は北西から南東方向におよそ700mと広大な範囲に亘っており、墓地内での合葬墓所在地の特定を容易にし、墓地の形成過程をより詳細に検討するため、便宜的に50m×50mのグリッドを墓坑分布図上に設定し、北西-南東方向に1-13、北東-南西方向にA-Cの計39のグリッドを設けた (図3、6)⁷⁾。次に、ピートリーらによる墓坑分布図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI) から墓の場所を特定し、各墓の年代を示した記号を地図上に、分類を示した記号を墓番号の脇に落とした。なお、J. C. ペインはカイザー編年を基にした自身の編年案を基に、大墓地における墓地の拡大過程を提案しており (図3)、空間分析に当たって参照した。

5. 分析結果

5.1. 合葬墓の集成結果

発掘報告書、及びノートからの集成の結果、合計で75

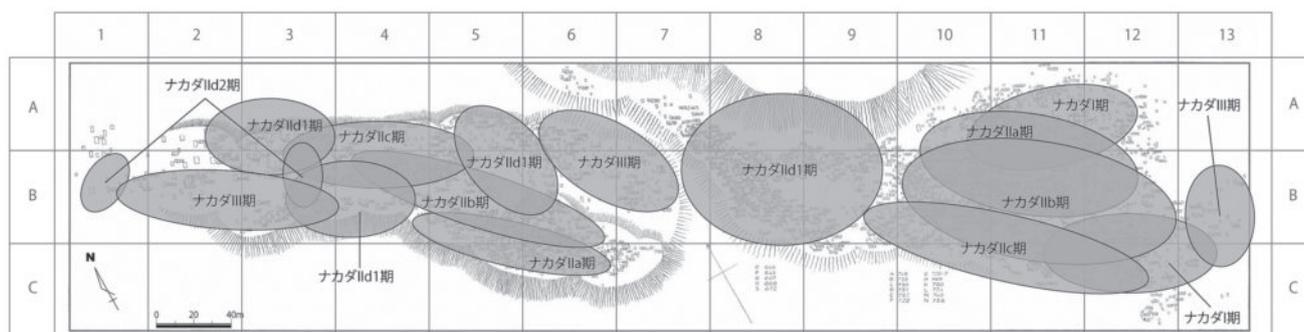


図3 ペインによって示されたナカダ遺跡大墓地の拡大過程 (Payne 1992: Figs. 1, 2 を元に作成)

基の合葬墓を確認することができた。墓地別には大墓地53基、B墓地14基、T墓地8基であった。割合では、ナカダ遺跡の3墓地で少なくとも想定されうる全墓坑数2146基のおよそ3.5%に相当し、墓地別にみると、大墓地では少なくとも2.7%、B墓地の少なくとも10.2%、T墓地の13.5%にあたる⁸⁾。つまり合葬墓は、大墓地においては極めて少数に留まるものの、B墓地・T墓地の双方では、墓群を構成する墓の10%を超える割合で合葬墓が含まれていることが明らかとなった。今回の作業により、発掘調査報告書やノート記載事項を取り扱った先行研究と比較すると大幅な事例数の増加となった。

5.2. 埋葬様式の分類結果、及び合葬墓の空間分析結果

A. 埋葬様式の分類結果

次にこの集成結果をもとに合葬墓の分類を行ったところ、タイプⅠ：同時埋葬墓(図4：1-3)、タイプⅡ：追葬墓(図4：4、5)、タイプⅢ：改葬墓(図4：6-8)、タイプ

Ⅳ：分類不可墓の4種類に分類することができた。Ⅳに関しては、盗掘などによりオリジナルな埋葬の状況が看取不可能な事例や、平面図が存在しないため検出状況が不明な事例が該当する。タイプⅠ-Ⅲへと分ける際に基準とした項目や定義・特徴は以下の通りである。

タイプⅠ：同時埋葬墓は、同一の墓坑内に複数の遺体が存在している墓を指す。ナカダ文化の合葬墓の中でも最も一般的な墓であり、追葬の痕跡を示さず複数埋葬される。同時性を示す根拠の一つとして、解剖学的な原位置を留め、一部を重ねて隣り合うように埋葬された遺体の検出が挙げられる。

タイプⅡ：追葬墓は、複数の埋葬からなり、それらの間に若干の時間差が看取され得るが、構成する埋葬間で何らかの明確な関連性を有する墓を指す。この分類には、a：ある土坑墓に別の土坑墓が接続し一つの墓を構成している事例や、b：2つないし3つの埋葬が規則性を持って極めて近接して検出された事例を指す。aに関しては、単に土坑墓が見かけでは切り合う形で接続している墓は含まず、互いの墓の接続部に、板状の石を複数並べる(図4：4)など、長期的な時間的隔たりによる偶発的な切り合いの結果とは捉えがたい事例が対象となる。bに関しては、遺体は各々別の埋葬に納められながらも、互いに関連性を持っていると看取される検出状況を有する事例を含む(図4：5)⁹⁾。

タイプⅢ：改葬墓は、複数人数分の遺体が検出され、かつそれらが盗掘などによる影響を被っていないのにも関わらず、人骨が一か所に集積した状態で検出されたり(図4：8)、整然と並べられたりする(図4：6、7)など、解剖学的な原位置を大きく逸脱した二次葬の状態を検出された墓を指す。

集成により明らかになった単葬墓を含むタイプ別/時期別の墓数は表2の通りである。合葬墓に関しては、タイプⅠが45基、タイプⅡが10基、タイプⅢが5基、タイプⅣが15基であり、墓地別では、タイプⅠが、大墓地で38基、B墓地で5基、T墓地で2基(表3)、タイプⅡが、大墓地で4基、B墓地で6基(表4)、タイプⅢが、大墓地で3基、T墓地で2基(表5)、タイプⅣが大墓地で8基、B墓地で3基、T墓地で4基(表6)であった。T墓地ではタイプⅡが、B墓地ではタイプⅢが、それぞれ確認できなかった。

さらにこの結果から三か所の墓地の合葬墓を合算し、ヘンドリクスにより付与された各合葬墓の年代別の墓数とその単葬墓に対する割合の推移が図5である。時期不明の墓坑数は多いが、Ⅰ期には比較的多くの割合を合葬墓が占めており、特にⅠB期にその割合が大きい(21.1%)。Ⅰ期に合葬墓が多く存在する傾向にあるとした先行研究による知見(Midant-Reynes 2000: 47)は、未公開資料を用いた本

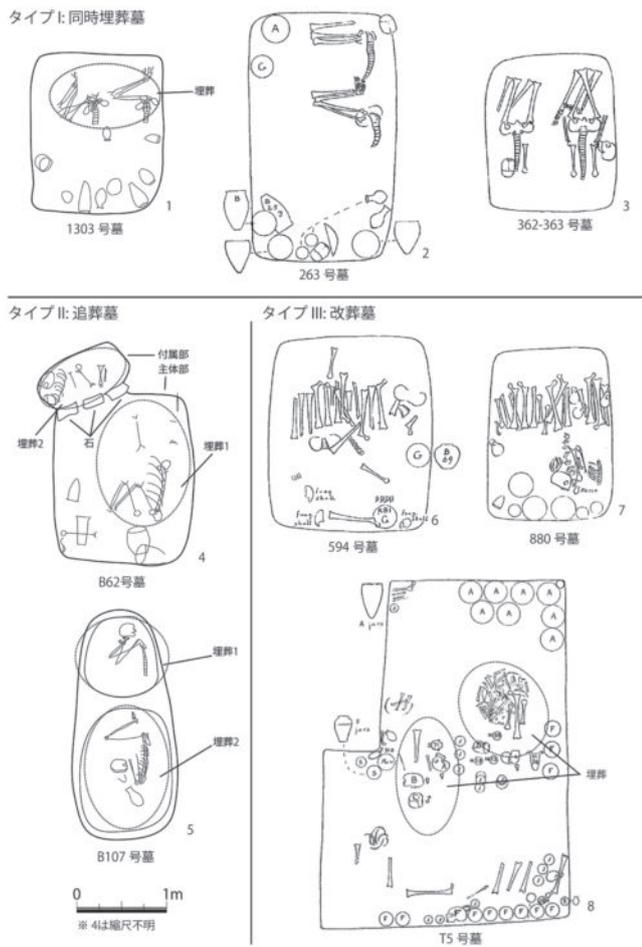


図4 合葬墓の分類例 (2, 3, 6-8: Petrie and Quibell 1896: Pls. LXXXII, LXXXIII) (1: Book 136, 4: Book 71, 5: Book 70 からトレス、UCL ピートルリー・エジプト考古学博物館より使用許諾)

表2 ナカダ遺跡各墓地におけるタイプ別/時期別墓数

| 大墓地 | IA | IB | IC | IIA | IIB | IIC | IID1 | IID2 | IIIA1 | IIIA2 | IIIB | IIIC1 | 計 | 時期不明 | 合計 | | |
|-----------|----|----|----|-----|-----|-----|------|------|-------|-------|------|-------|-----|--------|-----|------|--------|
| 単葬墓 | 11 | 14 | 79 | 54 | 80 | 137 | 66 | 43 | 12 | 23 | 15 | 1 | 535 | 94.9% | 797 | 1332 | 96.5% |
| 合葬墓タイプI | 1 | 3 | 9 | 1 | 6 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 | 1 | 0 | 23 | 3.9% | 15 | 38 | 2.5% |
| 合葬墓タイプII | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0.2% | 3 | 4 | 0.3% |
| 合葬墓タイプIII | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0.3% | 1 | 3 | 0.2% |
| 合葬墓タイプIV | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 4 | 0.7% | 4 | 8 | 0.5% |
| 総計 | 12 | 18 | 88 | 55 | 87 | 139 | 67 | 44 | 12 | 24 | 18 | 1 | 565 | 100.0% | 820 | 1385 | 100.0% |
| B 墓地 | IA | IB | IC | IIA | IIB | IIC | IID1 | IID2 | IIIA1 | IIIA2 | IIIB | IIIC1 | 計 | 時期不明 | 合計 | | |
| 単葬墓 | 0 | 1 | 3 | 3 | 4 | 4 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 18 | 90.5% | 80 | 98 | 89.0% |
| 合葬墓タイプI | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4.8% | 4 | 5 | 3.9% |
| 合葬墓タイプII | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4.8% | 5 | 6 | 4.7% |
| 合葬墓タイプIII | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.0% | 0 | 0 | 0.0% |
| 合葬墓タイプIV | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.0% | 3 | 3 | 2.4% |
| 総計 | 0 | 1 | 3 | 3 | 5 | 5 | 2 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 20 | 100.1% | 92 | 112 | 100.0% |
| T 墓地 | IA | IB | IC | IIA | IIB | IIC | IID1 | IID2 | IIIA1 | IIIA2 | IIIB | IIIC1 | 計 | 時期不明 | 合計 | | |
| 単葬墓 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 | 3 | 2 | 0 | 4 | 1 | 0 | 13 | 83.3% | 31 | 44 | 86.4% |
| 合葬墓タイプI | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5.6% | 1 | 2 | 3.4% |
| 合葬墓タイプII | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0.0% | 0 | 0 | 0.0% |
| 合葬墓タイプIII | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5.6% | 1 | 2 | 3.4% |
| 合葬墓タイプIV | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 5.6% | 3 | 4 | 6.8% |
| 総計 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 3 | 4 | 2 | 0 | 4 | 1 | 0 | 16 | 100.1% | 36 | 52 | 100.0% |

分析でも確認されたとと言えるだろう。II A 期以降では、II B 期と III B 期に一時的な高まりを見せるが、全般的には 3%以下であり、極めて少ない数しか確認できない。II B 期と III B 期における増加に関しては、II B 期ではその背景は明瞭ではないが、III B 期の場合はずでに墓地使用期間の末期であり、墓地自体の使用頻度が低下した一方で、単葬墓に比べ、合葬墓が造営される頻度が高くなったことが考えられる。

B. 合葬墓の空間分析結果

ピートリーらによる墓坑分布図上で合葬墓の位置を確認した結果、75 基の合葬墓のうち、計 30 基の合葬墓の所在位置を把握できた。所在位置を集めてきた合葬墓の数は全体の 40%だが、墓坑分布図に記された墓番号が一部のため、多くの墓の場所が特定できなかった。これら 30 基の位置を、前項で明らかにした埋葬様式のタイプと帰属する編年を加えて墓坑分布図上にマッピングした図が図 6 (大墓地)、図 7 (左:T 墓地・右:B 墓地) である。以下では埋葬様式のタイプ順に空間分析の結果を示していく。

5.2.1. タイプ I : 同時埋葬墓

大墓地において、タイプ I は、涸れ谷によって東地区と西地区に分割される両地区に分布する。分布状況に著しい偏りが看取されるか所は見られないが、西地区では、タイプ IV である 1338 号墓を除き、全ての合葬墓がタイプ I であり、他のタイプは見られない。東地区では、G11A、G11B、G12A、G12B を中心に分布が確認されるが、ピートリーらによる墓坑分布図に記された多数の単葬墓の存在

を勘案すると著しい集中を見せているとは言えない。この理由には、墓地の形成過程が密接に関わっていると推測される。ヘンドリクスによって年代が与えられた大墓地の 38 基のタイプ I のうち、位置が確認できた墓は 20 基だが、この内ナカダ I 期に属する 6 基 (IB 期: 2 基、IC 期: 4 基) が全てタイプ I で東地区の G11-12、A-B の範囲に分布する。この範囲は、ペインによって示された最初期に墓地が形成された二か所の範囲を含んでおり (Payne 1992: 185, Fig. 2) (図 3)、墓が比較的散在して分布しているのが特徴である。最初期の IA 期に属する合葬墓の位置は把握しえないものの、タイプ I は大墓地の使用が開始された比較的早い段階から単葬墓と混在して造営されていたことになる。ペインによれば、ナカダ II 期になると東地区の墓地は、それまでの I 期の使用範囲と重なりつつ II 期半ばまで徐々に南に墓地が広がり、II 期の後半には G7A や G8A-B などより砂漠側が墓地として用いられたほか、それまで造墓活動が行われなかった西地区でも II 期初期から G5B-C や G6B-C を中心に墓地が形成され、東地区と同様に漸進的に砂漠側へ広がっていくとされる (Payne 1992: Figs. 1, 2) (図 3)。特にタイプ I は各期間に使用された墓地空間に造墓されていたことが分布から窺え、一つの墓坑に埋葬される人数こそ複数であるものの、単葬墓と比べ少なくとも造墓場所に際立った違いはないようである。

およそ 90m×45m の墓地範囲に広がる B 墓地では、検出された数こそ少ないものの、北東側にタイプ I の存在を確認することができた。この偏在の理由に関しては、一見すると B 墓地中央部における各墓の情報が欠落している影響によると思われる。しかし、137 基分の墓番号が振ら

表3 分類I墓一覧表

| グリッド | 墓番号 | 編年 | 被葬者数 | 副葬品の種類と数* | 墓坑規模 (m) | 墓坑形状 | 遺存状態 | 出典** |
|-------|---------|--------|--------------------|--|--|------------------------|--------------------------------------|---------------------------------|
| 2-3B | 108 | II B | [主体部] 4 [付属部] 1 | [主体部] 土器: c. 20 [5]、牙状製品: 2 [2]、櫛、ダチャウの卵、フリント製石器: 4、パレット破片: 2、貝: 複数 [1]、フリント燧石製ペンダント: [1]、礫: [2] [付属部] 土器: 4 [2]、フリント製石器: [1] | [主体部] 2.59×1.68 [付属部] 0.92×0.92 | [主体部] 長方形 [付属部] 正方形 | [主体部] 部分的に擾乱? [付属部] 部分的に擾乱? | Book 70 |
| 3B | 113 | III B | 3 | 土器: c. 16 [5]、石製容器: [3]、パレット: [3]、ビーズ: [2] | 不明 | 長方形 | 擾乱 | Book 71 |
| 5B | 217 | II B | 2 | 土器: [1]、パレット: [1] | 2.16×1.65×1.40 | 隅丸長方形 | 擾乱? | Book 72 |
| 5B | 218 | - | 2 | 土器: 8 [2]、石製容器: 1、銅製穿孔具: [1]、銅製バンド: 1、フリント製石器: 4 [2]、パレット: 2、魚: 1、骨鏝: 2、礫: 1 | 2.67×1.40×1.40 | 長方形 | 擾乱 | Book 72 |
| 4B | 226 | - | 2 | 土器: c. 12 [1]、パレット: [1]、象牙製牙状製品: [2] | 1.78×1.02×1.52 | 長方形 | 部分的に擾乱 | Book 72 |
| 5C | 263 | II B | 2 | 土器: 11 [1] | 2.41×1.40×1.27 | 長方形 | 部分的に擾乱 | PQ: 21, pl. LXXXIII; Book 72 |
| 5B | 269 | II B | 2 | 土器: 5、パレット: [1] | 1.52×1.40×1.02 | 隅丸長方形 | 部分的に擾乱 | Book 72 |
| 6C | 283 | III A2 | 3 | 土器: [1]、パレット: [1] | 1.68×1.00 | 隅丸長方形 | 部分的に擾乱 | PQ: 21-22, pl. LXXXIII |
| 6B | 362-363 | ? | 2 | パレット: [1] | 1.56×1.24 | 長方形 | 不明 | PQ: 22, pl. LXXXIII |
| 10B | 751 | II D2 | 2 | 土器: 3 [1] | 1.52×0.76×1.02 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 72 |
| - | 1248 | II B | 2+ | 土器: 2 [1]、石製容器: 4 [3]、パレット: [1]、ビーズ: 1 [1]、銅製バンド: [1]、象牙製腕輪: [2]、象牙製ピン: 1 | 不明 | 不明 | 未擾乱? | PQ: 27 |
| 2B | 1251 | - | 2 | 土器: 2+ [2]、スレート製タグ: 2、骨製タグ: 1、象牙製櫛: 1、象牙製ヘアピン: 2、粘土製球: 2 [1] | 2.16×1.52 | 不明 | 不明 | PQ: 28 |
| - | 1303 | ? | 2 | 土器: 10 [2]、フリント製石器: [4] | 1.78×1.27×1.27 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 136 |
| - | 1358 | - | 2 | 土器: 5? [3] | 1.78×1.27×1.27 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 136 |
| - | 1364 | - | 2 | 土器: 7 [1] | 1.52×1.52×1.02 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 136 |
| - | 1365 | ? | 3 | 土器: 3 | 1.52×1.27×1.27 | 長方形 | 未擾乱? | Book 136 |
| - | 1410 | - | 2+ | 土器: [1]、フリント製石器: [2]、彩色木製棒: [1]、果実またはナッツ: [多数] | 不明 | 不明 | 部分的に擾乱? | PQ: 28 |
| 11B | 1411 | II B | 7 | 土器: [5]、パレット: [1]、象牙製容器: [1]、象牙製腕輪: [1]、象牙製櫛: [3]、角製容器: [1]、骨製腕輪: 1、木製品?: [1]、種子: [2] | 不明 | 不明 | 不明 | PQ: 28 |
| - | 1415 | - | 2 | 土器: 2+ [1]、 | 不明 | 不明 | 未擾乱? | PQ: 28 |
| - | 1417 | - | 2 | 土器: 4、石製容器: 1、パレット: 1、フリント製石器: [4]、象牙製櫛: 2 [1]、骨製櫛: [1]、閃長岩製棍棒頭: 1、石灰岩製棍棒頭模造品: 1 [1]、木製品? [1] | 不明 | 不明 | 未擾乱? | PQ: 28 |
| - | 1507 | IC | 2 | 土器: [2]、石製容器: 1 [1]、ビーズ: [1]、角製櫛: 1+ [2] | 不明 | 不明 | 未擾乱? | PQ: 29 |
| 11A-B | 1545 | ? | 2 | 土器: 4、ネックレス: 1、ビーズ: [1] | 不明 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 138 |
| 11A | 1547 | II A | 2 | 土器: 10 [4]、ビーズ: [1]、礫: [1]、木製品?: [1] | 不明 (大型墓との言及あり) | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 138 |
| 11B | 1573 | IC | 2 | 土器: 3、パレット: [1] | 不明 | 長方形 | 未擾乱? | Book 138 |
| 11A | 1583 | IB | 2 | 土器: 3 [1]、象牙製牙状製品: [2]、象牙製小像: [1]、砂岩製タグ: [1]、石灰岩製タグ: [1]、アラバスター製ペンダント: 1 | 不明 | 長方形 | 未擾乱? | PQ: 29; Book 138 |
| - | 1587 | IB | 4 | 土器: 6 [5]、石製容器: 2、石灰岩製棍棒頭: [1]、貝製腕輪: [13]、象牙製腕輪: [1]、象牙製牙状製品: [1]、コーン状製品: [8]、革製品: [1]、革製容器: [1] | 2.41×1.78×1.78 | 楕円形 | 部分的に擾乱? | Book 137 |
| - | 1592 | ? | 2 | 土器: 4? [1]、ビーズ: [1]、象牙製指輪: [5]、骨製指輪: [2]、樹脂類: [1] | 2.03×1.78×2.03 | 楕円形 | 擾乱? | Book 137 |
| - | 1606 | IC | 2 | 土器: 9 [4]、象牙製タグ: [3]、貝: 1 [1]、針: 1 | 2.03×2.03×2.41 | 楕円形 | 擾乱? | Book 137 |
| - | 1613 | IC | 2 | 土器: 2+ [8]、パレット: [1]、フリント製石器: 1、ビーズ: 1 [1]、象牙製指輪: [10]、象牙製腕輪: [2]、貝製腕輪: [3]、象牙製品?: [1]、樹脂: 1 | 1.52×1.52×1.78 | 隅丸正方形 | 未擾乱? | Book 137 |
| - | 1615 | IC | 3 | 土器: 3 [2]、フリント製石器?: 1、象牙製櫛: [1]、ビーズ: 1? | 1.52×1.52×1.78 | 長方形 | 擾乱? | PQ: 29; Book 137? |
| 12B | 1654 | IC | 2 | 土器: 6 [4]、石製容器: 5 [2]、石灰岩製棍棒頭: [1]、フリント製石器: 2、象牙製櫛: 2、象牙製ヘアピン: 1 [1]、ビーズ: 1、マラカイト: [1] | 2.03×1.78×2.03 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 137 |
| - | 1676 | IA | 2 | 土器: 1+ [3]、棍棒頭: 1、石製容器: [1]、フリント製石器: [5] | 1.65×1.65×0.15 | 正方形 | 部分的に擾乱? | PQ: 29; Book 139 |
| 12B | 1687 | IB | 2 | 土器: 12 [4]、粘土製小像: 1 [1]、象牙製櫛: 1 [1]、礫: 1 [1]、ビーズ: 1 | 1.65×1.65 | 隅丸正方形 | 部分的に擾乱? | Book 139 |
| - | 1704 | ? | 2 | 土器: 3? | 不明 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 138 |
| - | 1739 | - | 3 | 土器?、ビーズ? (詳細不明) | 1.65×1.52×1.65 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 139 |
| 11A | 1751 | IC | 2 | 土器: 5 [2]、パレット: 1 [1]、粘土?: 1 | 1.52×1.52×1.78 | 楕円形 | 未擾乱? | Book 139 |
| 12A | 1814 | IC | 2 | 土器: 6 [3] | 不明 | 隅丸長方形 | 部分的に擾乱? | Book 138 |
| - | 1820 | IC | 2 | 土器: 5、石製容器: 1 [1]、パレット: 1 [1] | 不明 | 長方形 | 未擾乱? | Book 138 |
| - | B105 | II B | 2 | 土器: 3 | 2.16×1.78 | 長方形 | 部分的に擾乱? | PQ: 23; Book 70 |
| - | B117 | ? | 2 | 土器: 3、象牙製腕輪: 2 [2]、象牙製櫛: [1]、ビーズ: [1] | 1.22×1.07 | 不定形 | 部分的に擾乱? | PQ: 24; Book 70 |
| - | B119A | ? | 2 | 土器: 4 | 計測不可 | 長方形? | 擾乱 | Book 70 |
| - | B126 | ? | 2 | 土器: 11、礫: [1] | 2.13×1.52 | 変形長方形 | 部分的に擾乱? | PQ: 24; Book 70 |
| - | B133 | - | 2 | 土器: 8 [1]、パレット: [1]、礫 | 2.13×1.52 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 70 |
| - | T10 | II D1 | 3 | 土器: c. 10 | [レンガ無] 3.05×1.68×1.27 | 長方形 | 部分的に擾乱? | PQ: 24, Book 71 |
| - | T22 | - | 2 | 土器: 12 [3]、パレット、閃長岩製棍棒頭: [1]、フリント製石器: 2 [2]、銅製品? | 1.78×1.78×0.25-0.51 | 長方形 | 部分的に擾乱? | PQ: 24; Book 72 |

*ブラケット内の数字は、博物館にて所蔵が確認される数、ブラケットのない数字はノートから数えられる副葬品数を指す。
**Book はビートルリーのノート番号を指す。PQ は W. M. F. Petrie and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas* の略称である。

表 4 分類Ⅱ墓一覧表

| グリッド | 墓番号 | 編年 | 被葬者数 | 副葬品の種類と数* | 墓坑面積 (m) | 墓坑形状 | 遺存状態 | 出典** |
|------|-------|-------|----------------------------|---|--|----------------------------------|--------------------------------------|-----------------|
| 8B | 519 | II D1 | [主体部] 1 [付属部] 1 | [主体部] 土器: 9 [3]、パレット: 1 [1] [付属部] 土器: 9 [1]、磗 | [主体部] 2.44×1.22 [付属部] 1.22×0.61 | [主体部] 長方形 [付属部] 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 70 |
| 8B | 1037 | ? | 3? | 土器: 2、パレット: 1、ビーズ: 2 [1]、象牙製腕輪: 1 [1] | [主体部] 2.08×1.07×1.52 [付属部] 不明 | 不明 | 不明 | PQ: 27 |
| — | 1535 | ? | [北側] 1 [西側] 1 [東側] 1 | [北側] 土器: 4 [西側] 土器: 4 [東側] 土器: 2 | [北側] 不明 [西側] 不明 [東側] 不明 | [北側] 長方形 [西側] 長方形 [東側] 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 138 |
| 12B | 1729 | ? | 2 | 土器: 13? [3]、パレット: [1] | 不明 | 変形長方形 | 擾乱? | Book 138 |
| — | B50 | II C | [上層] 1 [下層] 2 | [上層] 土器: 3、ビーズ: 複数? [下層] 土器: 17 [上層・下層合計で土器: 2、ビーズ: 4の所蔵を確認] | 不明 | [上層] 長方形? [下層] 長方形 | [上層] 擾乱 [下層] 未擾乱? | PQ: 23, Book 71 |
| — | B62 | ? | [主体部] 1 [付属部] 1 | 土器: 4 | [主体部] 1.78×1.14×0.89 [付属部] 1.02×0.61 | [主体部] 長方形 [付属部] 長方形 | 未擾乱? | PQ: 23, Book 71 |
| — | B107 | ? | [北側] 1 [南側] 1 | 土器: 1 | [全体] 2.44×1.07 [北側墓坑] 1.07×0.76 [南側墓坑] 1.37×1.07 | 隅丸長方形 | [北側] 未擾乱? [南側] 未擾乱? | PQ: 24, Book 70 |
| — | B111 | ? | [上層] 1 [下層] 3 | なし。遺体のみ。 | [北側 (上層)] 1.52×1.52 [南側 (下層)] 1.22×1.07 | 正方形 変形楕円形 | [北側] 部分的に擾乱? [南側] 部分的に擾乱? | Book 70 |
| — | B119B | ? | [主体部] 1 [付属部] 1 | [主体部] 遺物なし。遺体のみ。 [付属部] 土器: 1、パレット | [主体部] 2.44×1.07 [付属部] 1.07×1.07 | [主体部] 不定形 [付属部] 半楕円形 | [主体部] 部分的に擾乱? [付属部] 未擾乱? | Book 70 |
| — | B122 | ? | [主体部] 1 [付属部] 1 | 土器: 4 | [主体部] 1.83×1.07 [付属部] 0.91×0.60 | [主体部] 長方形 [付属部] 楕円形 | [主体部] 部分的に擾乱? [付属部] 部分的に擾乱? | Book 70 |

*ブラケット内の数字は、博物館にて所蔵が確認される数、ブラケットのない数字はノートから数えられる副葬品数を指す。
**Book はピートリーのノート番号を指す。PQ は W. M. F. Petrie and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas* の略称である。

表 5 分類Ⅲ墓一覧表

| グリッド | 墓番号 | 編年 | 被葬者数 | 副葬品の種類と数* | 墓坑規模 (m) | 墓坑形状 | 遺存状態 | 出典** |
|------|------|------|------|--|--------------------|-----------|---------|--|
| 8B | 594 | II C | 4 | 土器: 2 | 1.92×1.68 | 長方形 | 部分的に擾乱? | PQ: 22, 32, pl. LXXXIII |
| — | 878 | ? | 2+ | 不明 | 2.03×1.27×1.02 | 不明 | 擾乱 | PQ: 27 |
| 11C | 880* | II B | 4 | 土器: 7 [1]、樹脂: 1 | 1.76×1.20 | 長方形 | 未擾乱 | PQ: 23, 32, pl. LXXXIII |
| — | T5 | II C | 6 | 土器: c. 42 [20]、石製容器: 5 [6]、パレット: [1]、ビーズ: [2]、ペンダント: [1]、マラカイト: [1]、磗: [1] | ca. 4.00×2.48 | 一部を欠いた長方形 | 未擾乱 | PQ: 19-20, pl. LXXXII, Book 71 Davis 1983: 18 |
| — | T15 | ? | 6+ | 土器: c. 6、ビーズ | ca. 4.50×2.76×1.52 | 長方形 | 擾乱 | PQ: 24, Book 71; Davis 1983: 19; Kemp 1973: 41 |

*ブラケット内の数字は、博物館にて所蔵が確認される数、ブラケットのない数字はノートから数えられる副葬品数を指す。
**Book はピートリーのノート番号を指す。PQ は W. M. F. Petrie and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas* の略称である。

れた中で、B 墓地の墓の 95 基分の平面図ないしは出土状況に関する記録が発掘報告書やノートにて確認できることからサンプリングバイアスの可能性が一概に高いとは言えない。この中でヘンドリクスにより時期が付与された墓はナカダ II B 期の B105 号墓の 1 基のみであるが、近隣に所在する B119 号墓や B133 号墓はピートリーによって S. D. 46、およびやや広いが S. D. 35-54 が与えられ (Petrie 1920: pl. LI)、それぞれ II 期中盤から後半、I 期の終わりから II 期の後半を含む範囲に相当すること (表 1) から、B105 号墓を含む北東部の墓群は概ね II 期初期から中盤以降まで使用されたことが推定される。従って、時期不明である 7 基の墓に関してもやや確度に欠けるが概ね B105 号墓と同時期に相当すると考えられ、地理的に狭い範囲にタ

イプ I が設けられたことが推察できる。

T 墓地では、南北 50 m、東西 30 m の比較的狭い範囲に墓が密集する北側の墓群でナカダ II D1 期のタイプ I が 1 基 (T10 号墓) だけ確認された。なおこの他に場所が特定できない T22 号墓が存在する。T 墓地の墓は遺存状況が概して悪いため、実際には他にもタイプ I が営まれた可能性は高いが、確定はできない。

5.2.2. タイプ II : 追葬墓

大墓地に所在する本タイプの合葬墓の 2 基はどちらも時期不明だが、1037 号墓は G8B に、1729 号墓は G12B に分布する。1729 号墓は、ピートリーによって、ナカダ II 期前半に比定される S. D. 40 を与えられており (Petrie

表6 分類Ⅳ墓一覧表

| グリッド | 墓番号 | 編年 | 被葬者数 | 副葬品の種類と数* | 墓坑規模 (m) | 墓坑形状 | 遺存状態 | 出典** |
|-------|--------|----|------|--|----------------|-------|---------|--|
| — | 408 | ⅢB | 2 | 土器：[1] | 不明 | 不明 | 不明 | only Fawcett |
| 9-10B | 822 | ⅡC | 2 | 土器：[1]、パレット：1、ビーズ：1、マラカイト塊：1 | 1.78×1.27×1.52 | 不明 | 擾乱 | PQ: 27 |
| 11C | 879 | ? | 2 | 土器：[3] | 不明 | 不明 | 不明 | only Fawcett |
| — | 1201* | ? | 2 | 土器：[3]、銅製バンド：[3]、アラバスター製棍棒頭：[1]、貝製腕輪：[2] | 不明 | 不明 | 不明 | only Fawcett |
| 7B | 1338 | ⅢB | 2 | 土器：[2]、ビーズ：[1]、亀甲製腕輪：[1] | 不明 | 不明 | 不明 | only Fawcett |
| — | 1499 | ⅠB | 2 | 土器：[2] | 不明 | 不明 | 不明 | only Fawcett |
| 10B | 1660 | — | 2 | 石製容器：[1]、フリント製石器：[3] | 1.78×1.78 | 不明 | 不明 | Book 137 |
| 12A | 1673 | ? | 3 | 不明 | 1.52×1.14×1.78 | 不明 | 不明 | Book 139 |
| — | B15 | ? | 3 | 土器：3、ビーズ：1 [1] | 不明 | 変形長方形 | 擾乱 | Book 71 |
| — | B30-31 | ? | 2 | なし。遺体のみ。 | 不明 | 長方形 | 部分的に擾乱? | Book 71 |
| — | B34 | ? | 2+ | 土器：12 | 1.65×1.65×1.27 | 長方形 | 擾乱? | Book 71 |
| — | T4 | ⅡB | 7? | [上層] 土器：1 [中層] 不明 [下層] 土器：c. 32、石製容器：3 [4]、フリント製石器：[1]、牙状製品：2、パレット：5 [2]、象牙製タグ：[2]、ダチョウの卵：[1]、象牙製櫛：[1]、貝：[1]、黄鉄鉱：[1]、礫：複数 [3] [土器は33点収蔵確認。上層か下層か出土由来不明] | 3.32×2.04 | 長方形 | 部分的に擾乱 | PQ: 18-19, pl. LXXXII, Book 71; Davis 1983: 18 |
| — | T20 | — | 3 | 土器：7 [2]、石製容器：2+ [2] | 不明 | 長方形 | 擾乱 | Book 72; Davis 1983: 19; Kemp 1973: 41 |
| — | T23 | — | 7 | 土器：複数 [3] | 3.81×1.78 | 長方形 | 擾乱 | Book 72; Davis 1983: 20; Kemp 1973: 41 |
| — | T29 | — | 2? | 土器：c. 10、石灰岩製円筒印章：[1]、ビーズ：[1]、礫：[1] | 不明 | 長方形 | 擾乱 | Book 72; Davis 1983: 20 |

*ブラケット内の数字は、博物館にて所蔵が確認される数、ブラケットのない数字はノートから数えられる副葬品数を指す。
** Book はピートリーのノート番号を指す。PQ は W. M. F. Petrie and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas* の略称である。

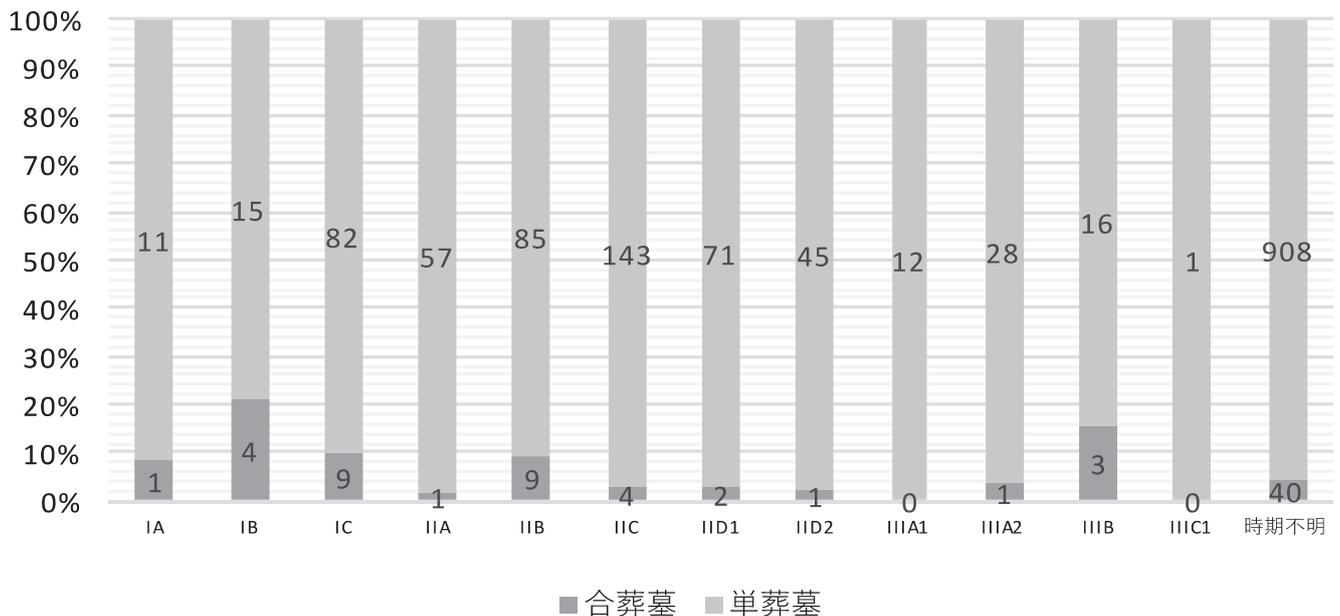


図5 合葬墓の検出数と割合、およびその通時的変化

1920: pl. LI)、立地している範囲もⅠ期からⅡC期が中心であるため、通常の単葬墓の造営と区別なく造墓されたと考えられる。一方で、1037号墓は、Ⅱ期後半に主に使用された範囲に分布しているものの、ピートリーによって S. D. 60-70 とⅢ期に相当する年代を与えられている。Ⅲ期は西地区や東地区で複数の集中的な墓群を形成している場合もあるが、大墓地全体で散発的な造墓が見られるのも

特徴である (Payne 1992: Figs. 1, 2)。同時代の墓群には分布しない点が注目される。

B墓地では、墓地の北東側と南西側の両方で分布が確認された。北側の墓群では比較的近接して造墓がなされており、墓数は少ないが北東側の墓群の東側から南側での偏在が伺える。南側ではナカダⅡC期のタイプⅡが1基 (B50号墓) 見られ、近接して時期不明の墓1基 (B62号墓) が

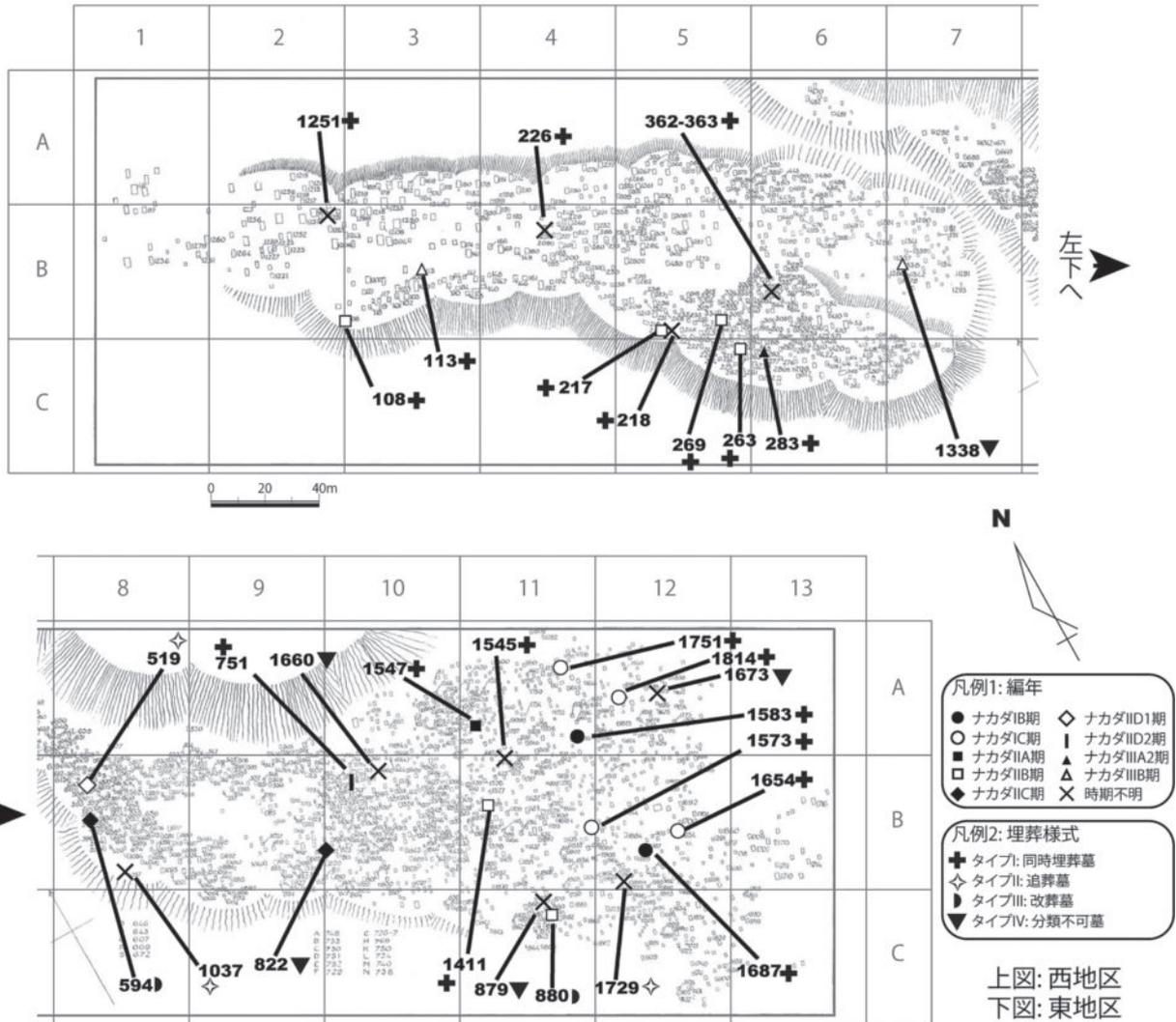


図6 ナカダ遺跡大墓地における合葬墓の分布と50m²仮グリッド

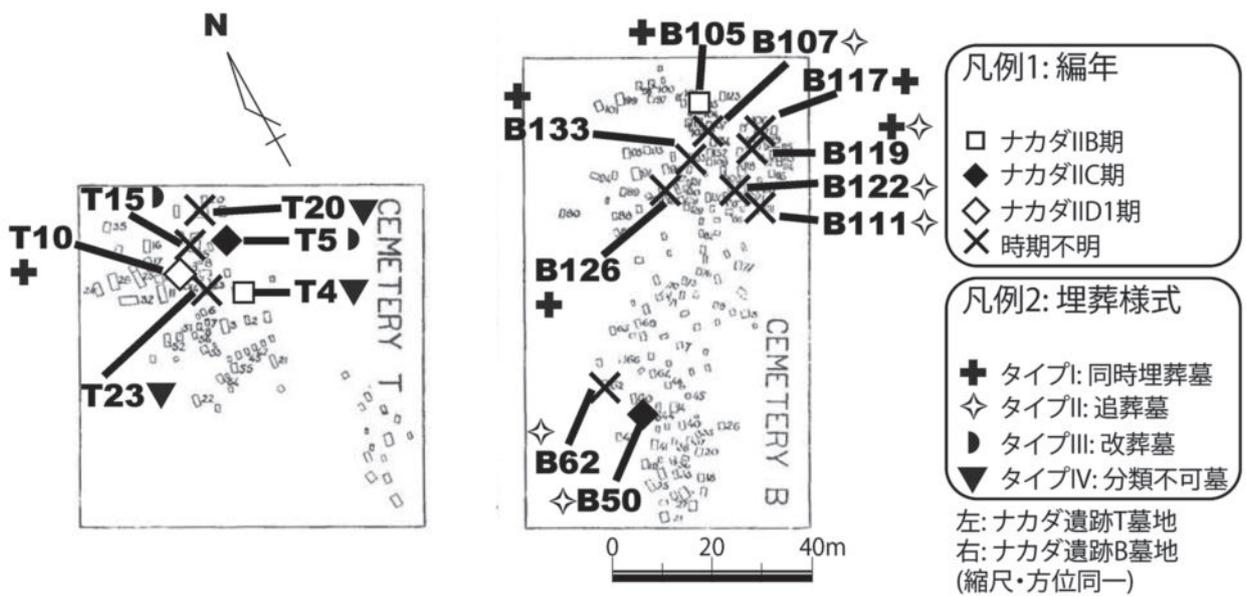


図7 ナカダ遺跡B墓地・T墓地における合葬墓の分布

分布している。

5.2.3. タイプⅢ：改葬墓

大墓地では、東地区にのみ見られ、G8B (594号墓) と G11C (880号墓) の2基が分布している。年代的には後者がナカダⅡB期、前者がⅡC期に帰属し、それぞれ概ね同時期の墓群の中に分布している。両墓の分布は離れており、少数かつ特殊な同じ埋葬様式であっても特定の墓地を形成しないと判断できる。むしろ重要な点は、墓地自体の拡大過程に準じて分布していることだろう。

T墓地には、ナカダⅡC期 (T5号墓)、時期不明 (T15号墓) の2つのタイプⅢが確認され、相対的な距離は10 m前後と近接する。墓地の範囲が狭いT墓地において、さらに狭い範囲に近接して同タイプの合葬墓が分布している点が注目される。

タイプⅢは、B墓地では確認されず、大墓地とT墓地に共通する埋葬様式と言える。また判明している限りでは、時期的にはナカダⅡ期半ばに限って両墓地で共通して営まれる点も明らかとなった。

5.2.4. タイプⅣ：分類不可墓

分類上の定義から積極的な言及は難しいが、大墓地とT墓地において分布を確認できた。一方でB墓地では、このタイプに帰属する墓は確認されなかった。T墓地では、日乾レンガを用いた大型墓で7人の遺体が検出された時期不明のT23号墓がタイプⅢの合葬墓と近接して存在している。タイプⅢの一つであるT15号墓は日乾レンガを用いており、類似した構造的特徴を持つ墓が近接して分布することが確認される。T23号墓はノート上での遺体の検出状況が不明であるため、タイプⅠ-Ⅲのいずれであったかは判別できないが、墓の構造的特徴と墓の分布状況が元来の合葬墓のタイプの手がかりとなる可能性がある。

5.3. 小結

以上のA・Bの分析結果をまとめると、ナカダ遺跡では、合葬墓には、タイプⅠ、タイプⅡ、タイプⅢの3種類の埋葬様式が存在し、大墓地では全ての埋葬様式が見られるのに対して、B墓地ではタイプⅠとタイプⅡが、T墓地ではタイプⅠとタイプⅢが存在することが読み取れた。また割合としては、タイプⅠは大墓地に多く見られるのに対し、タイプⅡはB墓地に集中的に存在する点が明らかとなった。タイプⅢに関しては、T墓地における事例が耳目を引くが、大墓地においてもT墓地と同時期のナカダⅡB-C期にタイプⅢが存在する点は注目される。

また、合葬墓の墓地内での分布に関しては、大墓地では全ての埋葬様式が単葬墓と混在して墓地全体に造営され、

偏在性は見られなかった。B墓地ではタイプⅠが墓地の北東側に集中し、南西側には見られなかったのに対し、タイプⅡは墓地の北東側と南西側の双方に存在することがわかった。また、T墓地では、タイプⅢが墓地の北側に集中していることが判明した。

6. 考察

それではこの分類・空間分析の結果から、ナカダ遺跡における合葬墓に関わる墓地利用に関していかなる解釈が得られるだろうか。以下では、3つのタイプの合葬墓の成因を、分布分析によって判明した合葬墓のタイプの偏在性に留意しつつ検討し、さらにB墓地とT墓地において見られた合葬墓の空間的限定性について考察し、ナカダ遺跡にて3つの合葬墓のタイプが造営されることの背景の一端に接近を試みる。

合葬墓の中でもっとも多く観察できたタイプⅠは、ナカダ文化で一般的な単葬墓と、墓坑に埋葬される被葬者の数が複数か単数かという点を除けば多くの様式上の共通点を有することから、単葬墓の変型として考えて大過ない。すなわちその造営の背景には、死者の同時発生、ないしは時間的に極めて近接して死者が複数発生したことが考えられる。複数の死者が発生した理由には、トーマスが指摘するような産褥死なども当然考えられるが (Thomas 2004: 1045-1047)、ナカダ遺跡ではmtDNAなど遺伝学的な証拠が提示されていないため、たとえ成人女性と新生児の組み合わせが検出されたとしても、それが母子である可能性だけでなく、偶発的に死者が同時発生し、同一の墓坑に埋葬した可能性も残る。大墓地において、同時合葬墓の分布に集中性が見られず、各段階において使用されていた墓地の中に単葬墓と混じって分布するという空間分析による結果も、タイプⅠの合葬墓が単葬墓と区別なく造営されたことの傍証と捉えることができるであろう。

タイプⅡに関しては、すでに存在した墓坑を認知した上で追加して埋葬を設けている点で、タイプⅠとは異なる造営理由があると言える。ナカダ文化の墓地では、王朝時代やグレコ・ローマン期などの後世の土坑墓による事例を除き、基本的にナカダ文化の墓坑同士は切り合わないことが特徴である (高宮 2003: 122)。ナカダ文化の土坑墓では、埋め戻し後に、墓がマウンド状を呈しており (Reisner 1936: 1-2)¹⁰⁾、先行して造営された土坑墓の存在は先王朝時代の人々に認識されていたと考えられる。実際にヒエラコンポリス遺跡HK43地点では、このことを裏付けるかのように円環状に配列される墓群が検出されており (Friedman et al. 1999)、ナカダ文化社会では、墓の造営と墓群の形成にリネージなど系譜関係に基づいた原理が存在した可能性を示唆する¹¹⁾。こうした系譜関係を意識し

た造墓行為がナカダ遺跡にも敷衍できるとするのならば、タイプⅡに含まれる、先行して存在する土坑墓の一部を切り合うようにして造営される事例（519号墓・B62号墓など）や、2つないし3つの土坑墓が極めて近接して造営されている事例（1535号墓・B107号墓など）は、あえて埋葬を追加するという点で、先行する墓の被葬者と追葬された被葬者との間に系譜を意識した造墓が行われたと推察することも可能だろう¹²⁾。そしてB墓地では、確認されたタイプⅡの合葬墓10基のうち6基が見られ、墓地全体の面積と構成墓数に比して、タイプⅡの合葬墓が造営されることが多いことから、墓地の形成に系譜関係が関わっていたと示唆される。このB墓地で顕著な特徴に関しては、墓地を形成した集団の違いに求めることができるかもしれない。すなわち、B墓地の母集落は、大墓地の母集落のサウスタウンではなく、その南方約2kmほどに所在するKh. 4と呼称されるナカダⅠ-Ⅱ期の小規模な集落址とされており（van Wetering 2014）、地理的に近接した集落同士でも、ナカダ文化の基本的な埋葬様式上の特徴は共有しながらも、より細かな点では相違点が存在する可能性が指摘されよう。

その一方でタイプⅢに関しては、遺骨を集葬した再葬である点において、タイプⅠ・Ⅱとは極めて異質な特徴を有している。この改葬行為を考える上で手がかりとなるのが、ヒエラコンポリス遺跡HK43地点などで観察された頭部や頸部に切断痕を有する遺体など（Dougherty and Friedman 2008）、主にナカダⅡ期半ばに見られる死後に遺体へ何らかの処置を施したり、特定部位の持ち出しを行ったりする事例である。こうした遺体の破損行為には、例えば遺体の頭部の持ち出しは合葬墓に限らず単葬墓においても見られ、アダイマ遺跡やナカダ遺跡などでも報告されているほか、特にアダイマ遺跡東墓地S166号墓では、遺体がまだ腐朽していない状態で腕部を切断し、その後屈葬状態の腕部の定位置に戻した事例が存在し、この遺体の破損が葬送儀礼の参列者に観察されながら行われた可能性が指摘されている（Crubézy et al. 2008）。このことから、ナカダ文化墓における遺体の破損行為は、全てが当てはまるとは限らないが、それを観察する葬送行為に参加した人々の間で共有されたと推測できる。遺体が一部を破損ないしは欠損されながらも屈葬状態を保った状態で検出されるこれらの事例と、タイプⅢの合葬墓に関しては、被葬者の埋葬姿勢では大きな隔りがあることは否めないが、重要な点は葬送行為が参列者に観察され、遺体への処置が行われた可能性が存在することであろう。こうした埋葬行為への人々の参加は、人々がリネージなど自身の系譜関係などを意識・再確認するための場であると理解出来る¹³⁾。ナカダ遺跡のタイプⅢの合葬墓の場合、遺骨が整

然と並べられた事例（594号墓・880号墓）や遺骨を集積した事例（T5号墓）が存在するが、これらの合葬墓でも、遺骨の配置が参列者の観察の元に行われた可能性が指摘できるだろう。改葬が基本的には行われないナカダ文化の墓制の中での改葬墓の意義は、遺骨を墓坑に配置し、その行為を葬送儀礼に参加した人々が共有する一種の装置として機能したことにあると推察される。そこには、タイプⅠの同時埋葬墓の事例とは異質な目的を持った埋葬上の特徴が垣間見えるだけでなく、系譜関係を意識したと推察されるタイプⅡの合葬墓とも異なる、集団を結束させるための機能があったとも捉えられよう。ただし、タイプⅢの合葬墓は、年代が与えられている事例では、ⅡB期が2基、ⅡC期が1基であることから、ナカダⅡ期半ばに限定的な埋葬様式であったと考えられる。タイプⅢの合葬墓は、大墓地とT墓地にて観察されたが、墓地の規模とそこで構成される墓の数を勘案すれば、T墓地に特徴的な合葬墓であると考えられる。T墓地は、副葬品を対象とした研究（Bard 1994）や、ヒエラコンポリス遺跡の事例などとの墓構造の比較（Kaiser and Dreyer 1982; Kemp 1973）により、ナカダ遺跡の上位の社会階層の人々によって用いられた墓地であることが推定されてきた。そうした墓地における特殊な合葬墓の存在は、当該期において上位の社会階層の人々に関わる葬送儀礼が挙行されていた傍証と見ることもできよう。時期が先行するものの、ヒエラコンポリス遺跡の上位階層の墓地であるHK6地点では、ナカダⅠC-ⅡA期の墓である16号墓から土製のマスクが出土するなど（Friedman et al. 2011）、特殊な葬送儀礼が行われた可能性が強く示唆されている。ナカダ文化社会では、上位階層の人々の墓地で顕著な葬送儀礼が行われたという点に着目すれば、T墓地における改葬行為に関してもそうした特定の社会階層の人々の埋葬の際に行われた葬送儀礼の一環をなしていたと捉えることも可能だろう。

空間分析からは、B墓地とT墓地では、それぞれ合葬墓が立地する場所に偏りが見られた。具体的には、B墓地では、墓地の北東部分にタイプⅠとⅡの合葬墓が混在して分布しており、特にタイプⅡの場合、墓地の北東部分が、追葬行為が行われる範囲であった可能性がある。またT墓地では、墓地の北部分に2基のタイプⅢの合葬墓が存在するだけでなく、タイプⅠやⅣの墓も付近に存在することが特徴である。中でもタイプⅡの墓であるT15号墓（図8）やタイプⅣの墓であるT20号墓やT23号墓は日乾レンガ造りの壁体を有することが特徴であり（Kemp 1973）¹⁴⁾、墓地の北部分は特殊な構造を持つ墓が並ぶ空間であったと考えられる。従ってT墓地では、特に墓地の北部分が葬送行為上、特殊な意味を持った空間として利用されたと理解できよう。つまりB墓地やT墓地では、一

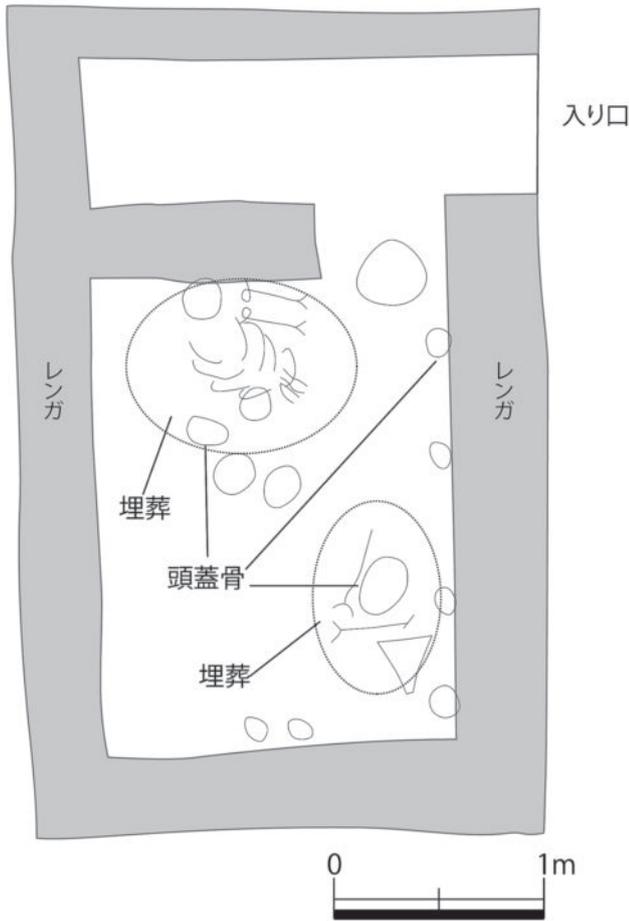


図8 T15号墓平面図 (Book 71 からトレース、UCL ピートリー・エジプト考古学博物館より使用許諾)

つの墓地の中でも、特定の箇所特定の埋葬上の意図を持った墓地利用がなされていた可能性が指摘できる。その一方でタイプⅠを中心にタイプⅡやⅢが見られた大墓地の分布状況からは、合葬墓からは明瞭な特徴を持った墓地利用が看取しえない。3種の合葬墓のタイプが存在した点は他のB・T墓地では見られない特徴だが、さらに合葬墓をめぐる墓地利用の具体性に踏み込むことは現状では困難である。大墓地における墓地利用の理解のためには、大多数を占める単葬墓を加味した検討が必要だろう。

7. 結論

本論では、ナカダ文化の墓地遺跡では例外的な合葬墓に着目し、19世紀末に発掘調査がなされたナカダ遺跡を対象として、未公開記録を用いた合葬墓の集成を行い、その上で検出状況から分類し、三か所の墓地における各分類の有無とその分布状況を明らかにすることによって、これまで不明瞭であったナカダ遺跡各墓地での合葬墓の特徴や、それをめぐる墓地の空間利用に関する考察を提示した。

その結果、各墓地では、複数の遺体を取める合葬墓で

あっても、墓地によって選択される埋葬様式は異なり、大墓地では同時埋葬墓を主体に追葬墓・改葬墓が見られる一方、B墓地では系譜関係を意識した埋葬行為が示唆される追葬墓が、T墓地では特殊な葬送儀礼の所産であると考えられる改葬墓が、それぞれの墓地において行われることが明らかとなった。これまで不明であったナカダ遺跡の一端が明らかとなったとともに、合葬墓を手掛かりに、近接する墓地であっても、集団の違いによる葬送儀礼上の細かな相違点や、特定の社会階層のための葬送儀礼が舉行される場が存在することが確認できたと言える。一口に合葬墓と言えども、その検出状況の細かな観察なしには、当該墓地の墓制を看取することはできないことは明らかであろう。

ある墓地を対象としてその墓制を復元するためには、本稿で扱った合葬墓に限らず、様々な視点から検討を加えることが必要なのは明白である。ナカダ文化の墓地遺跡には、未公開、あるいはごく一部の情報のみが明らかな事例が支配的であるが、未公開資料の有用性はそうした欠けた情報を少しでも補い、これまで未知であったナカダ文化社会の一面を描き出し得る点にある。今後とも、新規の発掘調査に加えて、視点や方法を変えつつ、研究史の初期に行われた遺跡の再検討を行っていくことが重要である。

無論、こうした方法には資料的な限界性が否めず、例えば、今回の空間分析的視点には、本来であれば墓地形成を捕捉することを目的とした精密な相対編年が欠如している。ナカダ遺跡の場合は、出土時の遺物全てが博物館に所蔵されているわけではないので、遺跡独自の編年を組むことは難しいことがその理由である。また、今回の分析での主要な出展資料は100年以上前の発掘現場でつけられたノートであり、ましてナカダ遺跡墓地発掘の初例であったこともあり、遺構の誤認が存在しないとも言い切れない。史料批判を行いつつ、可能な限り情報を回収することが必要だろう。

本論の目的の場合、本来であれば、被葬者の性差・年齢、それらの組み合わせなどが合葬墓を考える上で重要な分析項目であるが、すでに存在するデータは20世紀初期の計測であり、今後は博物館所蔵のナカダ遺跡出土人骨を計測し直す作業も必要だろう。また、繰り返しになるがバウムガルテルらの目録に記載された副葬品は発掘で得られた出土品の一部のみであるため、副葬品に関しても取り扱わなかった。ただ、副葬品の研究は墓制研究の最も重要な基幹の一つを担っており、今後課題を解決しつつ稿を改めて論じたい。本論での見解はあくまで埋葬状況の分類とその墓地内での分布状況からの見解であり、今後異なる切り口からナカダ遺跡を検討することで、ナカダ文化期の中心遺跡の一つであるナカダ遺跡の実態を明らかにし、エジプトにおける国家形成過程の一端を理解することを目指したい。

謝辞

本論は、2016年6月25・26日に立教大学にて行われた第21回日本西アジア考古学会大会において行ったポスター発表を下敷きとしている。学会では、近畿大学の高宮いづみ先生や金沢大学の河合望先生、東京大学の赤司千恵氏を始めとする聴講者の皆様と示唆に富む有益な議論を致すことができました。また査読者の方々からは貴重なご意見を頂いたほか、編集委員の皆様には大変お世話になりました。また、ポスター発表を含め、本論を草するにあたり、UCL ピートリー・エジプト考古学博物館の学芸員であるアリス・ステューヴンソン (Alice Stevenson) 博士からは同博物館が所蔵しているピートリーらのノート記載情報に関して、使用許可を頂きました。末筆ではありますが、ここに記して御礼を申し上げます。本論は、公益財団法人高梨学術奨励基金 平成25・27・28年度若手研究助成からの研究助成を受けて実施された研究成果の一部である。

註

- 1) ナカダ文化はナカダⅡ期後半以降に下エジプトにも文化圏を広げるが、Ⅰ期やⅡ期前半の埋葬が見られないため、本論では対象範囲を上エジプトに限る。
- 2) K. A. バード (Bard) は、発掘報告書に掲載された墓坑分布図 (Petrie and Quibell 1896: pl. LXXXVI) からナカダ遺跡の三か所の墓地から合計で2256基を数え上げている (Bard 1994: 79) が、各墓坑番号は全てに振られているわけではなく、記録から確実な墓坑数は約2200基と思われる。
- 3) G 墓地に関しては、構成墓数が推定6基と少なく、また出土した遺物の詳細も数点以外は不明であるため、明確な存続時期は不明瞭である。ただし、出土土器に関しては、2号墓からピートリー分類 (Petrie 1921) のW37、3号墓から同じL8、5号墓からL14Aが出土しているため、G 墓地の存続時期は概ねナカダⅢ期前半に相当すると考えられる。
- 4) 取得したノートは計11冊 (Books 69-72, 135-141) である。なお、J. J. カスティヨースは1978年夏に博物館を訪れノートを閲覧した旨を記しているが (Castillos 1981: 97, 1982: 33)、当時Books 135-141は未発見であり、彼の研究はBooks 69-72のみによるものと思われる。Books 135-141は1982年に再発見された (Friedman n.d.: 12)。
- 5) G 墓地は合葬墓が存在せず、対象としていない。
- 6) 内訳は、頭蓋骨290点、下顎骨のみの個体84点である。
- 7) 以後、グリッド番号に関しては、G+数字+アルファベットで呼称する。例えば、東西軸12、南北軸Cのグリッドを言及する際には、G12Cと記載する。
- 8) ナカダ遺跡の属性研究を行ったカスティヨースは、ノートも含め、被葬者数の確認出来る墓の数を墓地ごとに挙げているが、その分類は1-2人埋葬、3人以上、人数不詳としており、特に2人埋葬への対応に関しては本論で扱う合葬墓の定義とは齟齬が生じている (Castillos 1982: 33-45) ため、本論での集成結果との比較が困難となっている。
- 9) なお、a・bともに構成される埋葬の間に実際の時間差がどれほどあったのかについて明確化は限界があり、元となった記録の関係上やむなくタイプⅣまたは合葬墓から除外した事例も存在する。
- 10) ステューヴンソンは、墓の存在を示す何らかの墓標が存在した可能性を指摘している (Stevenson 2009b: 182)。
- 11) ナガ・エル＝デイル (Naga ed-Dêr) 遺跡 N7000 墓地においても墓地を6分する血縁集団による墓群の構成が述べられている (Savage 1997)。ただし、サヴェージュの研究には、用いた土器編

年など分析の基礎的な部分で疑義が提示されている (Delrue 2001)。

- 12) M. カンパーニョ (Campagno) は、ヒエラコンポリス HK43 地点に加えて、バダリ遺跡などで他の遺跡でも、墓群のまとまりや特定の副葬品から親族関係を反映した墓群が存在したことを述べている (Campagno 2003: 14-16)。
- 13) 例えば、日本列島の北部九州、弥生時代中期社会では、甕棺墓における葬送行為とそれへの参加による集団意識の再確認が論じられている (Mizoguchi 2014)。
- 14) T15 号墓に関しては、明確に繰り返し使用することを意図した墓構造であることが推察でき、その意味では追葬の性格を有していると考えられる。ただし、遺体の検出状況は原位置を示しておらず、また今回設定したタイプⅡの定義とは外れるため、タイプⅢとした。実態として、反復的に使用された改葬墓と予想される。

参考文献

- Bard, K. A. 1994 *From Farmers to Pharaohs: Mortuary Evidence for the Rise of Complex Society in Egypt*. Sheffield, Sheffield Academic Press.
- Barocas, C. 1986 Les raisons d'une fouille et d'un survey: le site de Naqadah. *Cahiers de recherches de l'Institut de Papyrologie et d'Égyptologie de Lille* 8: 17-28.
- Baumgartel, E. J. 1970 *Petrie's Naqada Excavation: A Supplement*. London, Bernard Quaritch.
- Campagno, M. 2003 Space and Shape: Notes on Pre- and Proto-State Funerary Practices in Ancient Egypt. In S. Bickel and A. Loprieno (eds.), *Basel Egyptology Prize 1: Junior Research in Egyptian History, Archaeology, and Philology*, 13-26. Basel, Schwabe.
- Castillos, J. J. 1981 An Analysis of the Tombs in the Predynastic Cemeteries at Naqada. *The Journal of the Society for the Study of Egyptian Antiquities* 11/2: 97-106.
- Castillos, J. J. 1982 *A Reappraisal of the Published Evidence on Egyptian Predynastic and Early Dynastic Cemeteries*. Toronto, Benben Publications.
- Castillos, J. J. 2015 The Egyptians and the Nile in the Predynastic Period. *Göttinger Miszellen* 247: 35-40.
- Ciałowicz, K. M. 1998 The King and His Retinue: The Origins of Archaic Accompanied Burials. *Gdańsk Archaeological Museum African Reports* 1: 23-32.
- Crubézy, É., S. Duchesne and B. Midant-Reynes 2008 The Predynastic Cemetery at Adaima (Upper Egypt): General Presentation and Implications for the Populations of Predynastic Egypt. In B. Midant-Reynes and Y. Tristant (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 289-310. Leuven, Peeters.
- Crubézy, É., T. Janin and B. Midant-Reynes 2002 *Adaima 2. La nécropole prédynastique*. Le Caire, Institut français d'archéologie orientale.
- Davis, W. M. 1986 Cemetery T at Nagada. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 39: 17-28.
- Delrue, P. 2001 The Predynastic Cemetery N7000 at Naga ed-Dêr: A Re-Evaluation. In H. Willems (ed.), *Social Aspects of Funerary Culture in the Egyptian Old and Middle Kingdom*, 21-66. Leuven, Peeters.
- Dougherty, S. P. and R. F. Friedman 2008 Sacred or Mundane: Scalping and Decapitation at Predynastic Hierakonpolis. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 311-338. Leuven, Peeters.
- Fawcett, C. D. 1902 A Second Study of the Variation and Correlation of the Human Skull, with Special Reference to the Naqada Crania. *Biometrika* 1: 408-467.

- Friedman, R. F. 2008 Excavating Egypt's Early Kings: Recent Discoveries in the Elite Cemetery at Hierakonpolis. In Y. Tristant and B. Midant-Reynes (eds.), *Egypt at its Origins 2*, 1157-1194. Leuven, Peeters.
- Friedman, R. F. (n.d.) *Elise Jenny Baumgartel 1892-1975*. http://www.brown.edu/Research/Breaking_Ground/bios/Baumgartel_Elise%20Jenny.pdf. (2017年1月15日閲覧)
- Friedman, R. F., A. Maish, A. G. Fahmy, J. C. Darnell and E. D. Johnson 1999 Preliminary Report on Field Work at Hierakonpolis: 1996-1998. *Journal of American Research Center in Egypt* 34: 1-35.
- Friedman, R. F., W. van Neer and V. Linseele 2011 The Elite Predynastic Cemetery at Hierakonpolis: 2009-2010 update. In R. F. Friedman and P. N. Fiske (eds.), *Egypt at its Origins 3*, 157-198. Leuven, Peeters.
- Griswold, W. 1992 Measuring Social Inequality at Armant. In R. F. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman*, 193-198. Oxford, Oxbow Books.
- Hassan, F. A. and R. G. Matson 1989 Seriation of Predynastic Potsherds from the Nagada Region. In L. Krzyżaniak and M. Kobusiewicz (eds.), *Late Prehistory of the Nile Basin and the Sahara*, 303-315. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- Hendrickx, S. 1989 *De Grafvelden der Naqada-Cultuur in Zuid-Egypte, met bijzondere Aandacht voor het Naqada III Grafveld te Elkab: Interne Chronologie en Sociale Differentiatie II: Tabellen en Bibliografie*. Unpublished Ph.D. Dissertation. Leuven, Kathorike Universiteit te Leuven.
- Hendrickx, S. 1996 The Relative Chronology of the Naqada Culture: Problems and Possibilities. In A. J. Spencer (ed.), *Aspects of Early Egypt*, 33-69. London, British Museum Press.
- Hendrickx, S. 1999 La chronologie de la préhistoire tardive et des débuts de l'histoire de l'Égypte. *Archéo-Nil* 9: 13-81.
- Hendrickx, S. 2006 Predynastic-Early Dynastic Chronology. In E. Hornung, R. Krauss and D. A. Warburton (eds.), *Ancient Egyptian Chronology*, 55-93. Leiden and Boston, Brill.
- Hendrickx, S. and E. C. M. van den Brink 2002 Inventory of Predynastic and Early Dynastic Cemetery and Settlement Sites in the Egyptian Nile Valley. In T. E. Levy and E. C. M. van den Brink (eds.), *Egypt and the Levant: Interrelations from the 4th through the Early 3rd Millennium B. C. E.*, 346-399. New York, Leicester University Press.
- Kaiser, W. 1957 Zur inneren Chronologie der Naqadakultur. *Archaeologia Geographica* 6: 69-77.
- Kaiser, W. 1961 Bericht über eine archäologisch-geologische Felduntersuchung in Ober- und Mittelägypten. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 17: 1-53.
- Kaiser, W. 1990 Zur Entstehung des gesamtägyptischen Staates. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 46: 287-299.
- Kaiser, W. and G. Dreyer 1982 Umm el-Qaab: Nachuntersuchungen im frühzeitlichen Königsfriedhof: 2. Vorbericht. *Mitteilungen des Deutschen Archäologischen Instituts, Abteilung Kairo* 28: 211-269.
- Kemp, B. J. 1973 Photographs of the Decorated Tomb at Hierakonpolis. *The Journal of Egyptian Archaeology* 59: 36-43.
- Mann, G. E. 1989 On the Accuracy of Sexing of Skeletons in Archaeological Reports. *The Journal of Egyptian Archaeology* 75: 246-249.
- di Maria, R. 2007 Naqada (Petrie's South Town): The Sealing Evidence. In H. Hanna (ed.), *The International Conference on Heritage of Naqada and Qus Region, Vol. I.*, 79-87. Cairo, ICOM.
- Midant-Reynes, B. 2000 The Naqada Period (c. 4000-3200 BC). In I. Shaw (ed.), *The Oxford History of Ancient Egypt*, 44-60. Oxford, Oxford University Press.
- Mizoguchi, K. 2014 The Centre of their Life-World: the Archaeology of Experience at the Middle Yayoi Cemetery of Tateiwa-Hotta, Japan. *Antiquity* 88: 836-850.
- de Morgan, J. 1897 *Recherches sur les origines de l'Égypte II: Ethnographie préhistorique et tombeau royal de Négadeh*. Paris, Ernest Leroux.
- Payne, J. C. 1987 Appendix to Naqada Excavations Supplement. *The Journal of Egyptian Archaeology* 73: 181-189.
- Payne, J. C. 1992 Predynastic Chronology at Naqada. In R. F. Friedman and B. Adams (eds.), *The Followers of Horus: Studies dedicated to Michael Allen Hoffman*, 185-192. Oxford, Oxbow Books.
- Petrie, W. M. F. 1920 *Prehistoric Egypt: Illustrated by over 1,000 objects in University College, London*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. 1921 *Corpus of Prehistoric Pottery and Palettes*. London, Bernard Quaritch.
- Petrie, W. M. F. and A. C. Mace 1901 *Diospolis Parva: Cemeteries of Abadiyeh and Hu*. London, Egypt Exploration Fund.
- Petrie, W. M. F. and J. E. Quibell 1896 *Naqada and Ballas*. London, Bernard Quaritch.
- Reisner, G. A. 1936 *The Development of the Egyptian Tomb down to the Accession of Cheops*. Cambridge MA, Harvard University Press.
- Savage, S. H. 1997 Decent Group Competition and Economic Strategies in Predynastic Egypt. *Journal of Anthropological Archaeology* 16: 226-268.
- Stevenson, A. 2009a *The Predynastic Egyptian Cemetery of el-Gerzeh: Social Identities and Mortuary Practices*. Leuven, Peeters.
- Stevenson, A. 2009b Social Relationships in Predynastic Burial. *The Journal of Egyptian Archaeology* 95: 175-192.
- Stevenson, A. 2013 Artefacts of excavation: The British collection and distribution of Egyptian finds to museums, 1880-1915. *Journal of the History of Collection* 26: 89-102. doi: 10.1093/jhc/ftt017.
- Stevenson, A. 2016 The Egyptian Predynastic and State Formation. *Journal of Archaeological Research*. doi: 10.1007/s10814-016-9094-7.
- Thomas, A. P. 2004 Some Comments on the Predynastic Cemetery at El-Mahasna. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 1041-1056. Leuven, Peeters.
- van Wetering, J. 2012 Relocating de Morgan's Royal Tomb at Naqada and Identifying its Occupant. In J. Kabaciński, M. Chłodnicki and M. Kobusiewicz (eds.), *Prehistory of Northeastern Africa: New Ideas and Discoveries*, 91-124. Poznań, Poznań Archaeological Museum.
- van Wetering, J. 2014 The Cemeteries of Nubt, Naqada Region, Upper Egypt. In B. Midant-Reynes and Y. Tristant (eds.), *Abstracts of Papers: Origins 5: Fifth International Conference of Predynastic and Early Dynastic Studies*, 113-114. Cairo, Institut français d'archéologie orientale.
- Vermeersch, P. M., W. van Neer and S. Hendrickx 2004 El Abadiya 2: A Naqada I Site near Danfiq, Upper Egypt. In S. Hendrickx, R. F. Friedman, K. M. Ciałowicz and M. Chłodnicki (eds.), *Egypt at its Origins: Studies in Memory of Barbara Adams*, 213-276. Leuven, Peeters.
- 高宮いづみ 2003 『エジプト文明の誕生』世界の考古学 14 同成社。
- 馬場匡浩 2014 「エジプトの王墓—ピラミッド出現に至る墓の変遷と文化・社会の変化—」アジア考古学四学会 (編) 『アジアの王墓』193-215 頁 高志書院。

黒沼 太一
首都大学東京大学院人文科学研究科博士課程
Taichi KURONUMA
Graduate School of Humanities,
Tokyo Metropolitan University